

聴覚障害者用の呼び出し器や筆談器

窓口の奥で「死蔵」



「バリアフリーはハードよりソフト」と話す中園さん

耳の聞こえない人が不便を感じやすい病院や金融機関の窓口。順番待ちの呼び出しを振動で知らせたり、紙がなくても繰り返し筆談に使える器具が商品化されたが、窓口の奥に死蔵され、

聴覚障害者にも知られていないという。商品を開発した聴覚障害者らが、利用者にひと目でわかるように表示するなど意識改革を求めている。【大和田香織】

金融機関、病院、役所…

「利用しやすい場所に」

開発者ら要望

表示を働きかけている。こす自覚まし時計など聴

覚障害者にも知られていないという。商品を開発した聴覚障害者らが、利用者にひと目でわかるように表示するなど意識改革を求めている。

のは、10年前に聴覚障害者用の企業、ワールドパイオニア（東京都中野区）を設立した中園秀喜さん（53）ら。振動で起

る。5年ほど前に商品化。筆談器と呼び出し器は振動して順番が来たことを知らせる。微弱な電波を使うので、病院の医療器具への影響もない。アンケートで聴覚障害者が困る場面を聞いたところ、病院、銀行、役所などの窓口を挙げる人が多く、開発した。

商品が旧郵政省や一部の航空会社、自治体などが購入したが、聴覚障害者の間でも知らない人が多い。郵政省からは数年前、「使われていない」と、予算削減を理由に追加購入を取りやめる

連絡も受け、中園さんが都内の郵便局を訪問してみると、窓口の奥にしまわれていることが多い。ソフト（配慮）が伴わなければ機能しない」と中園さん。聴覚障害者は椅子など違って外見では障害者とわからないうえ、手話や補聴器で補えると誤解されているが、

「年をとって聞こえなくなった人が大部分を占めるため、手話を理解する人は少なく、補聴器も神経にダメージを受けた人は使えない。窓口はさまざまな人が利用することをわかってほしい」と呼びかけている。

「バリアフリーはハードよりソフト」と話す中園さん

聴覚障がいとは『見えない障がい』です。不便なこと、改善してほしいことなどを行政、議会、施設、交通機関などに要望していただければ嬉しいです。「動かないと何も変わらない」のです。詳しくは下記にお問い合わせください。